

む
憂ゆう
憂じゅう
樹

発行

題字は現住職筆

浄土真宗 本願寺派 円融山 信行寺

〒662-0921 西宮市用海町1-22

TEL 0798-22-2282



写真：無憂樹の花

本紙の題名である「無憂樹」とは、菩提樹・沙羅双樹とならんで仏教の三大聖樹の一つとされており、お釈迦さまがこの木の下でお生まれになったといわれています。他の三大聖樹はいわれは、「菩提樹」の下でお釈迦さまがお悟りを開かれ、「沙羅双樹」の下でお釈迦さまがご入滅（亡くなられた）されたと伝えられています。

寺報発刊にあたり

平素は寺院護持のため、ご協力賜り、誠に有難うございます。

円融山・信行寺は、明徳二年（一三九一）に開基された浄土真宗・本願寺派（お西）の寺院です。現在の住職、教修は初代の浄専から数えて二十九代目にあたり、六二〇年以上もの長い間にわたり、多くの人々によって支えられてきました。そしてこのたび、新たな試みとして、信行寺だより「無憂樹」を発刊することになりました。

今後「無憂樹」は、阿弥陀さまのご法義や仏事相談・信行寺の活動・行事などの記事を中心に、年二回ほどの刊行を予定しています。この寺報とおして、御門徒の皆さま方が少しでも信行寺を身近に感じていただければ幸いです。

なお、寺報をご覧下さった際、忌憚なきご意見、ご感想を賜れば有難く存じます。それらのご意見を参考に、より良い寺報を作り上げていきたいと思っておりますのでご協力の程、宜しくお願い申し上げます。



副住職 入寺ご挨拶

この度、尊い仏縁に恵まれまして、信行寺の次期住職として入寺させていただきました。

来年、現住職が退任し、第三十世住職に就任させていただく予定です。

六二〇年以上受け継がれてきた信行寺の法灯を守り、阿弥陀如来さまの「み教え」をお取り次ぎしてまいりたいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

名前

四夷 法顕（しい ほうけん）

出身

一九八五年（昭和六十年）、西宮市鳴尾町の浄土真宗本願寺派・善教寺の次男として出生。

鳴尾小↓鳴尾中↓西宮東高校と進学。

大学は京都の龍谷大学（西本願寺の宗門校）で、「真宗学」を専攻。

趣味

雅楽・テニス

「みんなが集まる みんなのお寺」をモットーに、
今後は新たな行事なども立ち上げていく予定です。

仏事の疑問 Q & A

Q、法事は命日までに勤めなくてはならないのでしょうか？

A、法事の日取りはご命日にとらわれる必要はありません。

大変よく聞かれる質問です。

これにはまず、法事とは一体何のために勤めるのかを確認せねばなりません。浄土真宗における法事とは、亡き方を偲ぶと同時に、お浄土へ参られた故人さまの「いのち」をご縁として、この私が阿弥陀さまの「み教え」に出遇せていただく場です。

先立って往かれた方々が、わが命をかけて教えて下さるのは、「生死無常の理（ことわり）」です。老少不定という命のあり方をして、いるこの私にかけられている阿弥陀さまの願いを聞き、確かな拠り所となるお念仏を味わわせていただく中に、亡き方を偲ばせていただくことが法事の大切な意義ではないでしょうか。

そのように考えますと、法事の日取りはご命日にとらわれるのではなく、「ひとりでも多くの方が参詣できる日」を選んでいただくことが目安になります。日取りがたとえご命日より後になったとしても、皆さまが阿弥陀さまの前に座り、手を合わすことができるならば、その日が法事に最もふさわしい日となるでしょう。

法事とは、み教えに出遇う場であることはもちろん、親戚等、ご縁のある方々と会する場でもあります。それぞれがお互いにご縁のある方を通して、共に歩むお念仏の道を確認し、私の「いのち」のあり方を、静かに見つめなおすご縁としたいものです。

雑感

家に阿弥陀さま（お仏壇）を「安置する」ということ

お釈迦さまによって開かれた仏教に、「縁起」という教えがあります。

ダライ・ラマ十四世と並んで平和活動に従事し、ベトナム出身の代表的な仏教者であるティク・ナット・ハン氏は、この「縁起」の教えを、

「この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいる」

と表現します。この一枚の紙の存在は、雲の存在に依存しています。なぜなら、雲なしには水がなく、水なしには樹木は育たず、樹木なしには紙はできないからです。さらに紙を作るには木を伐る人が必要であり、森や人間が育つには太陽の光が必要であり、というように、その他一切のものがこの一枚の紙のなかにあると言えます。そして、この紙を見ている「わたしたち自身もこの紙の中にある」のだから、このわたしと関係のないものは何一つないと、

ハン氏は言うのです。

このように、この世界のすべてのものは関わり合って存在しているのだというのが「縁起」の教えです。こう考えてみますと、本来「縁起」とは、世間でよく「茶柱が立つと縁起が良い」とか、「縁起を担ぐ」と言われているような意味ではないことがわかります。

「縁起」の教えは、目に見えない、数え切れないお陰さまによって、「生かされている私」であることを教えて下さいます。しかし、慌ただしい日々の生活の中では、自分と直接関係のあることには気付いても、色々な関係の中で「生かされている」ということはいつい忘れがちです。そして、私達は目に見えないものは、つい「無い」ものだと思ってしまう。

私達の先輩方は、目に見えないご恩に気が付き、そして感謝出来るようにと、お仏壇という「形」にしてご用意を下さいました。

家庭というのは裸になって大いばりで歩ける所ですが、その中で膝を合わせ、手を合わし、賢い頭を下げて、阿弥陀さまのお慈悲を聞く場所を設けて下さったのです。

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないうってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」『星の王子様』より）

案外、大切なことは目には見えないものなのかもしれません。

目に見えない「ご恩」や「お陰さま」に對して、お礼を申し上げる場所が家の中に据えられているのは誠に有難いことです。阿弥陀さまの前に座り、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏を申し、お礼の日暮らしをさせていただきましょう。

（副住職）



西本願寺の本



親鸞聖人は、生涯に500余りの和讃を残しました。なかでも『浄土和讃』と『高僧和讃』は76歳、『正像末和讃』は85歳のときの成立で、88歳まで加筆・補正を続けられました。

晩年を迎えた親鸞聖人は、和讃を通して、共に生き、悩み、苦しみ、立ち尽くす人々に向かって、「私も同じ苦悩するものだ。しかし嘆くことはない。仏の温かなまなざしに気づいたなら、必ず人生は転換される」と語りかけています。

「三帖和讃」から62首を選ばれ、わかりやすい言葉で意識。親鸞聖人のおこころをたずねられ、現代人の課題などを通して、自他ともに心豊かに生きることとは何かを問われている。

大谷光真ご門主の、浄土真宗本願寺派門主としてご在任中最後のご著作。



弁護士で僧侶を目指す大平光代さんと、マスコミなどでも活躍中の僧侶・釈徹宗さんという話題のふたりによる初の対談本です。

大平さんの波瀾万丈の人生経験や、釈さんの専門である比較宗教思想をもとに、いじめや自殺、貧困、介護などをはじめとする現代社会の問題にスポットをあて、地域に根付いた浄土真宗文化（他力の暮らし）を掘り起こしています。混沌としたこの世を、仏教（浄土真宗）で生きる糸口が、数多く語られています。

【お問い合わせ】

～本願寺出版社HPより～

浄土真宗本願寺派 本願寺出版社

〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル

TEL 075-371-4171 FAX 075-341-7753

編集後記

◆なにぶん初めての試みのため、右往左往しながらでしたが、なんとか発刊することができました。

今後「無憂樹」を編集していく中で、記事にしてほしいものがあれば仰しやつて下さい。皆さま方のお知恵をお借りしながら、一緒に創りあげていきたいと思っています。

◆上記、ご紹介させていただいた本の著者、大谷光真様は、六月五日をもって本願寺ご門主をご退任なされ、「前門様」となられました。

本願寺の跡を継がれたのは光真前門様のご長男、大谷光淳様です。親鸞聖人から数えて、第二十五代目のご門主になられました。また一緒にご本山にお参りさせていただきましよう。

印刷 西宮市石在町二二三

水間印刷所